姉ちゃんとしてみましょ!
18禁
Presented by
色天使
成人向
FOR ADULT ONLY

姉ちゃんとしてみましょ!

18禁

Presented by
色天使

成人向
FOR ADULT ONLY

＜目次＞

5p「姉、ちゃんとしてみました!」
白猫参謀

26p「柊空也のクールな7日間」
タカヒロ

くーや背中ながしてあげるよっ♪

ん？

ねぇねぇ？

これは一体全体どういう展開で？

それはニャー…

長女命令じゃ!!
瀬芦里に高嶺の
素行調査を
命じる!!

どったの?
ひなのん

?

うむ…

実は先日の
出来事なのじゃが…

ぎゅっ

チリーン

話しが違うわっ!!
一度きりって約束
だったじゃない!!

ぎゃ

もう一度って!!
それじゃ
約束が違う!!

そっ…
そんなこと
言われても…

分かったわ
行きます

いけば
いいんでしょ

…と、そんな
ワケなのじゃ

高嶺がなにやら
心配でのぅ

なんだか陰謀の
臭いがするね
了解、任せてヨ!!

ということでクーヤも瀬芦里探偵事務所の助手になるニャ
でもそれわざわざ調べなくても高嶺姉貴に直接聞けば済むんじゃ
ガビッ
れあっ

お馬鹿さんだねクーヤは…
もしもタカが心に傷を負ってたら
私たちには絶対知られたくないはずだよ
う…たしかに

それに私もひなのんと同じでタカが心配だしね
ちゅっ♡
ムニュ♡

あーっ!? 瀬芦里お姉ちゃんずるーい!!
ガバッ
!?

くーやには私がお願いしようと思ったのにぃ♡

うみゃもわたしの助手になったんだよ

海お姉ちゃんも高嶺姉貴の件？

うみゃっち最初の任務は空也のスカウトだよ♪

らじゃ～♪

くーやー お姉ちゃん達と一緒にツインの悪行を調べ上げようよぉ～

悪行って

素直に私の子分になりなよクーヤ

ぽよん

ぽよん

助手になるのは別にいいんだけど高嶺姉貴の秘密を黙って調べるのはやっぱり悪いような…

なかなかしぶといねぇ…
うみゃ！こうなったらクーヤが降参するまで根比べだヨ!!
ラジャー♡
ぴちゅ♡
ぴちゅ♡
ぴゅぴゅ♡
ぷるっ♡

わかったやります!!
やらせていただきます!!
ドピュ
ドピュ
ドピュッ♡

それじゃ姉さん
ちょっと
出かけてくるわねー

出かけたね…

雛乃お姉ちゃんの
話しだと、誰かに
脅迫されて呼び
出されたらしいよ

脅迫!?

きっと荒くれ者の
見ず知らずの
男達に呼び出されて
あーんなことや
こーんなことを…

海お姉ちゃん
それって
落になってない…

タカはあー見えて
よそ者にはパンチラ
すら見せない
ガード性能だし

まぁ大丈夫だと
思うけどね

でもホントに
何処に行んだろう
姉貴…

なんかだんだん怪しい路地にはいってくよ

失楽園な感じだね～

あ、あの建物に入ったみたいだよ

ホテル ラビアンローズ

個室完備

アダルトビデオ ¥500

有料 ピンク

HOTEL 第1竜宮城

ドドーン

…こ、ここは!?

超!失楽園な感じだねぇ～♪

うみゃ その表現だいぶふるいよ

ん…、あれ?

ねぇねぇ どうかした?

この臭い… 間違いないニャ

ちょっと
ねぇねぇ!!

ザビュン

追いかけよう
海お姉ちゃん!!

世界の果てまでも
くーやを
追いかけるよ~♪

モエ
見い~っけ!!

あうっ
瀬芦里
姉さんっ!?

やっぱりモエの
ご飯の臭いだった♪

海の家
竜宮城

焼き蛤

ともねえ!?
あぅ
ちょっとアンタ達いったいどーいうつもりよ!!
タカ!?
ん?
ついーん
海の宝 竜宮城
姉貴!?
あれ?柊さんの知り合い?
海の宝
更衣室
!!
てめーが姉貴を脅してる糞野郎か!!
え?
ちょっと空也なに勘違いしてるのよ
え~高嶺お姉ちゃんその人に恥ずかしい写真とられて肉奴隷にされてるんじゃないの?
なんだそりゃ…

えぇ!!
海の幸
竜
ビール
ラムネ
パラソル
じゃあ例の電話ってその人の病気のお父さんの代わりに海の家の手伝いをしてくれっていうことだったの?
そっ一回きりの約束だったんだけどね
あのホテルはここの本店
いやぁ…高嶺さんの焼きそば通は海の家ではちょっとした噂でね頼み込んでみました
土下座までされちゃーね…
モエは?
巴ねえさんは私が考案したレシピ通りに作るシェフよ
早い話が巻き添えで扱き使われちゃったんだ
あう…
まぁ心配かけたわね今日で手伝いも終わりだから安心していいわ
別に心配してないけどね~
アンタはいったい何しに来たのよ!!
(・ε・)
モエお腹空いたーっ!!炭水化物、肉ーっ!!
あう、いま作るからちょっと待ってね
俺も手伝うよともねえ

御馳走様
美味しかったわ
お代、置いたわよ
まいどあり~
美人だなぁ…
ズルッ
アイス
お帰りなさいませ
要芽さま
お姉様ぁ、私も
ミントアイス
食べたかったですぅ
フサママイ…
いかがでした?
高嶺さん達の
ご様子は
フフフ…摩周くん
私はただミントアイスの
美味しい店の噂を聞いて
立ち寄っただけよ
ぽい

これにて海の家「竜宮城」閉店でーすありがとうございました～♪

フ～…結局手伝わされてしまった

あはは よく働いたね 偉い偉い

お疲れさん じゃーボクは親父の退院の手伝いとかに行くから君達は好きに飲み食いしていってよ

戸締まりヨロシク

焼きバ

チ焼きば

タラ焼きば

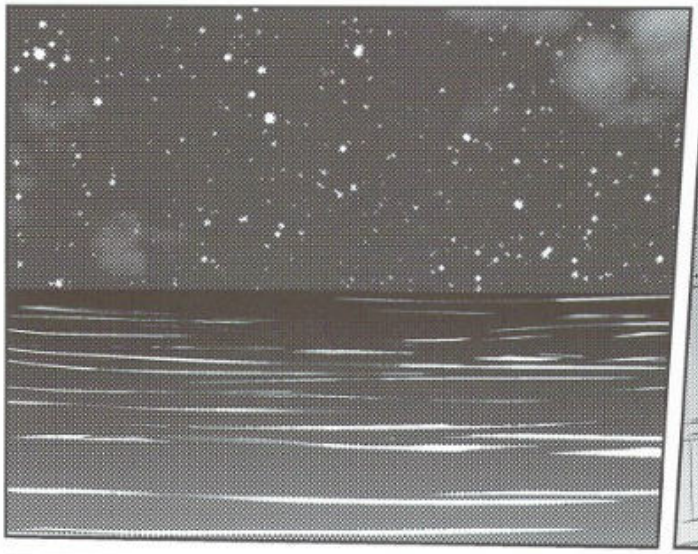
食べちゃっていいの？

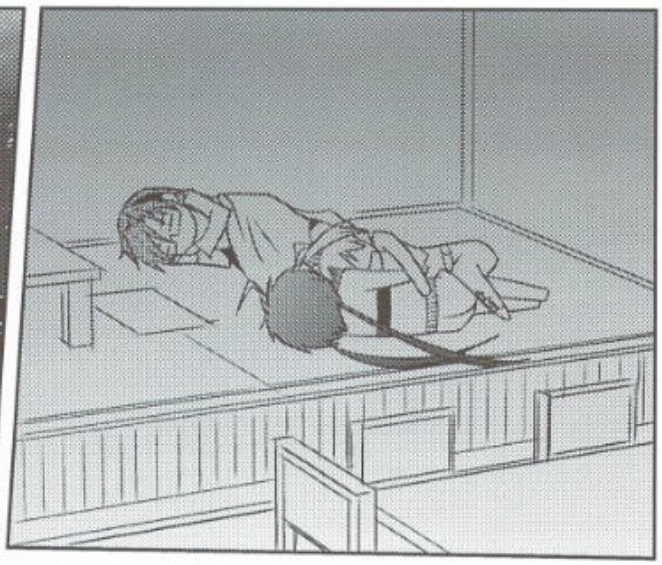
あぁ、今日で店仕舞いだから在庫残しても仕方ないんだ

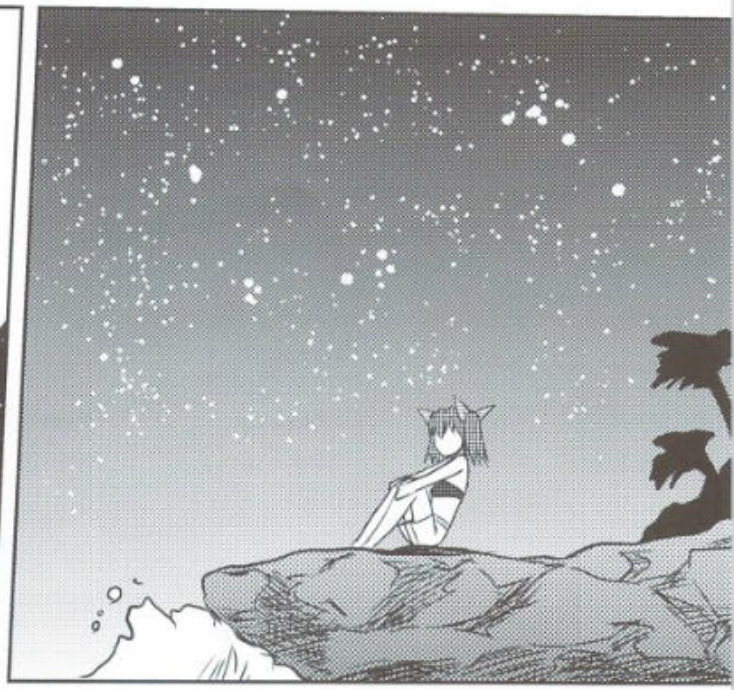
それじゃカンパーイ！

かんぱーい！

ニャンパーイ







おつかれ姉貴こんなところに居たんだ
ん、ちょっと風に当たってたの

アンタもいろいろ大変だったわね
まぁ…いつものことです

…ありがと
ん？なにが？

私が脅迫されてるって本気で怒ってくれた事…
…ちょっとかっこよかったぞイカのくせに
でもやっぱりイカなんだ

ドキ
ドキ
ザパーン
姉貴…八重歯に青海苔付いてる
ゴゴゴゴ
この駄イカッ!!
せっかくのムードが大無しじゃない!!
Help!!
アンタって奴はどうしてこう……
アンタなんか…

はむっ
んっ…
…馬鹿
空也…
…あたってる
……
ん？
ビキーン

ちょっ
姉貴!?

ブジジジ…

わっ!

ボロン

ドキ

イ…
イカの癖に勝手に
盛ってんじゃ
ないわよっ

ドキ

Chu

ぴちゅ

ん♡

ちゅ

あっ

姉貴…
そこヤバイ

ふふん…
いきたかったら
アタシにお願いしなさい

じゃ

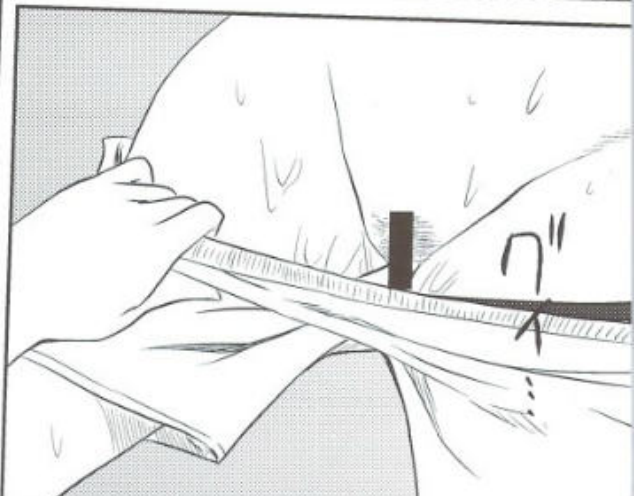
もーダメッ
出るっ!!

んっ

ぶふっ

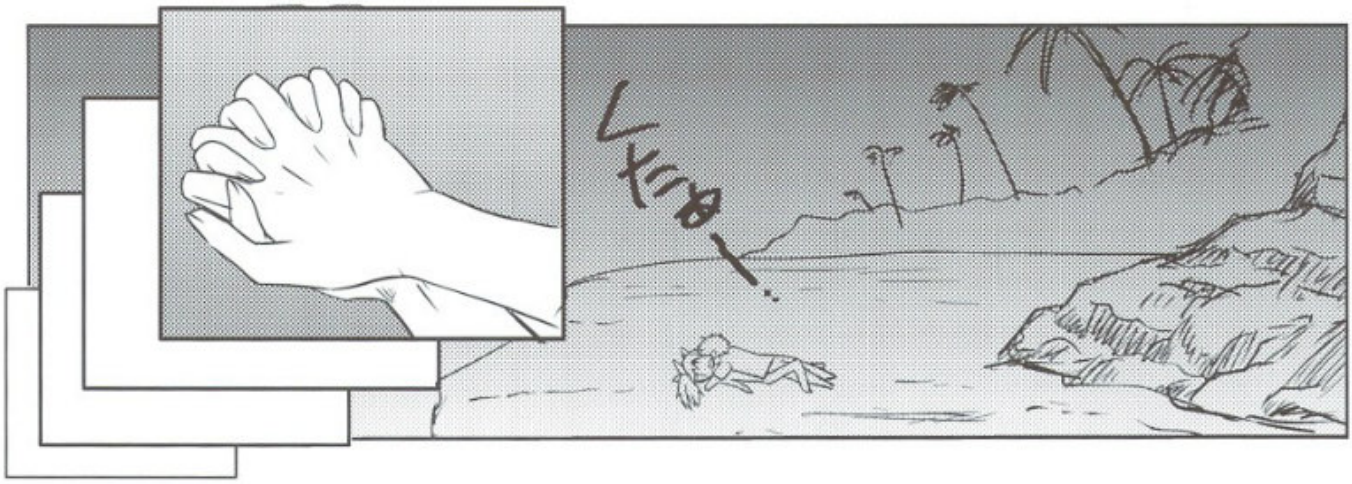
ぶふンッ!?

ごめん姉貴っ
もう我慢
出来ない!!



ちょっと空也っ!?
激し…すぎっ
ちょっ!!こらっ
あんッ♡
止まれぇっ

ドクン
ドクン
ドクン


ムだぁ…

で…我をさんざん心配させておいて

イカのせいで私まで寝過ぎて日焼けしちゃったじゃない!!
記憶にございません
あうぅ…
くーやとツインがペアルックだよ~
ふあぁぁ~お腹空いたぁ~
ふぁ~

お前達は酔いつぶれてそのまま寝ていたわけか

やかましいっ!!
粛正…淘汰…
END

『柊空也のクールな7日間』

「柊空也のクールな7日間」

1年後の俺、柊空也へ。
今、俺は親父の会社で働くために基礎体力を向上させたり勉学したりバイトをしたりと、いわゆる社会人になるための「準備運動」中です。1年後の俺はもう働き始めてるでしょう。……これからの1週間を赤裸々に日記に書き残しておきます。1年後のクール空也。この日記を読んで自分が成長しているか診断して下さい。それでは、8月後半ひと夏のメモリーをどうぞ。

★日曜日
柊家での朝――自室で目覚める。
いつものごとく、ねぇねぇに抱き枕にされていた。
しかも俺の部屋はクーラーが装備されていないので、ねぇねぇも裸にシャツ1枚で寝ているから、素肌にダイレクトに顔が密着しているわけで。
俺は寝ているねぇねぇを起こさないように抱きしめられている手をほどき、目の前にあるピンクの乳首を軽く吸ってイタズラした。
「Zzz……ん……クーヤったら……にゃは……」
ねぇねぇは眠りながらも反応してくれている。
片方を舐めたらもう片方もという事で、もう一つの乳首も唇でくわえて軽く吸ってから起きることにした。
俺も起きたが息子の空太郎が完全に起きてしまった。
「おはよう空太郎」
「やれやれだぜ」
我が息子(生殖器)だけあり、いつもながらクールな受け答えだ…しかし、朝から勃起してしまって大変。
掃除機のカナちゃんにブチこみたいが、音がうるさいので皆に迷惑をかけてしまう。
「おはよう」
朝、元気に活動している数少ない姉、雛乃姉さん。
「朝からあぴーるしているな。元気で実に結構」
雛乃姉さんは俺の勃起しているトランクスをじーっと見て、うむうむと頷いている。
「こ、これはお見苦しい所を。すぐ家事に入ります」
「まぁよい、ほれ我の部屋に来い」
姉さんに手を引かれていく。
「我がすっきりさせてやろうではないか、任せい」
「雛乃姉さん……良いのですか?」
「弟が悶々としていたら、相談にのってやらんとな」
姉さんはそう言うと、床に膝をついて俺のトランクスから勃起している肉棒を取り出して口に含んだ。
「ん……はむ……ちゅむ」
快感が腰から全身へジワリと広がっていく。
姉さんはそのまま袋の方も舐め始めた。
「はぷ……ちゅ、ここ、ぱんぱんであるな」
舐めた後、優しく揉みほぐしてくれた。
そのまま肉棒を頬張り、舐め回してくれる。
「ちゅむちゅむ…好きに出すがいい…れろ」
俺はたまらず、果ててしまった。
姉さんがあふれ出る精液を飲み込んでいく。
「はぁ、はぁ。大丈夫、姉さん?」
「うむ。それよりお前は1度でいいのか?」
「……ワンモア!」
「うむ!　男の子だ。それぐらい元気でなくてはな」
姉さんは射精後の敏感になっている亀頭を、舌で甘くマッサージしてきた。
口全体で肉棒を頬張り頭を前後させる。
そうしているウチに、2度目の絶頂に導かれる。
2回目の放出も、姉さんは口内で受け止めてくれた。
「……ありがとうございました……ふぅ」
「んぐ、ごく、ぷはっ…気持ちよかったようだな」
「……はい(恍惚)」
「飴をやろう。これを舐めて今度は家事に精を出せ」
うまい事を言われてしまい、台所へ向かう

まったく日曜なのに家事をしないといけない俺って、ちょっぴり不幸だぜ。
「おはよう空也。今日もいい天気だね」
「うん。俺の心も爽やかで体も軽いや」
「じゃあ今日も家事頑張ろうー！」
「おー！」
でもともねえぇと話せてなごめた。
そして夜、また俺の部屋にはねぇねぇがいる。
「さぁて寝るかにゃー。抱き枕おいでー」
ねぇねぇは俺を抱きかかえて頭を撫でると、いたずら好きな笑みを浮かべていった。
「今日はエロエロしてから寝るかにゃ。晩ご飯が少し足りなかったんで、クーヤを食べようと思いまーす」
着ている服を脱ぎ生まれたままの姿になるねぇねぇ。
「ねぇねぇ、何度見ても綺麗だよ」
喜んで申し出を受け入れた。抱き寄せてキスする。
「にゃふ……んむ……ちゅ……クーヤ」
ねぇねぇのキスはいつも情熱的だった。
俺はそのままねぇねぇを押し倒し愛撫を繰り返す。
見事な肉体を一通り味わった後に、肉棒を挿入した。
「ふぁあ、ああっ…、いいよクーヤ……！」
ねぇねぇの中は相変わらず生き物みたいだった。
少しは慣れてきたので、こちらも放出を我慢できる。
正常位でハメていると、ねぇねぇが感じて背を反らし見事なバストがぷるんと弾むように揺れる。
「ねぇねぇのここ、凄く魅力的だよ」
双乳をたぷたぷと好き放題に揉みしだいた。
「ふああん……クーヤ……いいよ、そのまま」
ねぇねぇに最後の一撃出来るだけ深く打ち込んだ。
「んんんっ……♪」
キュッと手で握るように収縮してくる姉の粘膜。
俺は思うまま、中に射精していた。

「えへへ、1回目終了だね…でもまだまだ」
「俺も、後2回いけるよ」
「よーし！　じゃあ次は私が上だ、とおっ！」
俺はねぇねぇに勢いよく押し倒された。
汗でぬるぬるの体をお互いすりつけ、溶けていく。

★月曜日
海お姉ちゃんと一緒にお風呂に入っていた。
「はい、くーや。体洗いましょうね～」
海お姉ちゃんは自分をブラシに見立ててその胸などで体をゴシゴシと洗ってくれる。
泡だらけのお姉ちゃんに包まれるのは至福だった。
キスの嵐もふらせてくれる。
そして、十分に勃起した所で挿入…一体感が増した。
「んん……どう、最近くーやは？」
「どうっていつも見てるじゃない。フツーだよ」
「んーそうかなぁ。無理してない？　んあっ」
「む、無理っすか？」
「ん、あっ、そ、そうだよ。そんなに焦ってお父さんの後を継ごうとしなくてもいいんだよ～」
「海お姉ちゃん……」
「くーや、真面目だから、ンッ、深く考えてるかもしれないけど私がサポートとかバッチリするから。ほんと大船ならぬ箱船に乗った気持ちでいてよ」
「な、なんという心強さ！」
「お姉ちゃんドバイでいい商売相手を見つけたんだ。お金の心配は全くないからねー」
頼もしいというレベルじゃなかった。
俺は最上の安心感と幸福感に包まれてお姉ちゃんの中に熱い精液をたっぷりと放った。
夜中、寝汗が出てきたのでもう1度風呂に入ると雛乃姉さんが先客だった。

「おお、我が背中を流してやろう」
さすがに姉さんは俺を洗う胸もないのでタオルで体を洗う感じだった。
「たくましいなぁ……引き締まった男の体。良いぞ」
前も後ろも丁寧にゴシゴシやってくれたので嬉しい。
しかも最後は……雛乃姉さんの得意技だった。
「仕上げが残っておるぞ、はむ、ん、ちゅ、ぺろ」
「んあ、ね、姉さんまた……」
「すっきりして出るがいい。ちゅぱちゅぱ……」
肉棒を舐めて精液を絞り出してくれた。
「姉さん…もう1回……出すまで舐めてくれない？」
「うむ……しゃぶりつくしてくれよう」
雛乃姉さんは肉棒を懸命にしゃぶってくれた。
じんわりとした快感の中で将来の事を考えていた。

★火曜日
今日は暑い中、高嶺姉貴の買い物に付き合った。
日頃勉強は見てもらっているので俺がご恩返しに付き合うのは分かるのだが、人使いの悪さが凄まじい。
「ほらイカ。この荷物も持ちなさいよ」
「姉貴、服まだ買うの？」
「当たり前でしょ。レディのショッピングは長いの」
改めて言うまでもないが柊家はそこそこ蓄えがある。
なので姉貴もお小遣いなどを遠慮無く服や趣味につぎ込んでいるのだ。
「どう、イカ？このデニムは似合うかしら？」
「あ、いいね。色落ちも雰囲気でてるし」
今は己の象徴であるツインテールを解いているので、ジーンズをはいても、結構似合っているあたり流石。
「――ふぅ、今日はどっさり買えて満足満足」
俺は家に帰り湯上がりの姉貴をマッサージしていた。
「アンタもまぁ役にたったわよ。少しだけでね」
「じゃあ褒美をくれ」
「うぬぼれんじゃないわよ、バーカ」

「あ、くれないんだ。器小さいな姉貴(失笑)」
「何か失笑だコラァ！上等じゃない何が欲しいのよ」
「姉貴そのものかな。久しぶりだし」
今日色々なファッションの姉貴を見て興奮した。
「ったくどーしようもないスケベね……あ！」
俺は姉貴を優しく押し倒し、そのまま挑みかかった。
「ちょ！　この……ン……あむ……ちゅっ、もう」
姉貴の唇に吸いついた。言葉遣い悪いのに甘い。
「弟とのスキンシップだよ姉貴」
「それにしてもいきな……ん……ちゅ」
姉貴に返事させないよう口の中にヌルリと舌を挿し込み、姉貴の舌に絡みついた。
キスをしながら、姉貴の服を脱がしてしまう。
こちらが唾液を流し込むと、姉貴は飲んでくれる。
そのままピンク色の乳首に舌を伸ばす。
「あっ……ん、舌の動き、やらしーわね」
「すぐに固くなる姉貴の胸の方がやらしー」
姉貴の小さな胸をたっぷりと優しく愛撫してから今度は股間に顔を埋める。
ピンク色のそこを30分ほど舐め続けた。
「もう十分濡れてるね……」
「あんた舐めすぎ……おかしくなりそう」
そのまま姉貴の中に肉棒を突き入れる。
「ん、く……あ、あぁぁっ……」
姉貴が可愛い声で鳴きはじめる。
ズブリと根元まで入れた肉棒を、今度はゆっくりと外に出す。そして勢いよく奥に。その一連の動作に、姉貴はピクンピクンと女体を反応させていた。
「いくよ姉貴！」
「あぁぁぁァーッ!!!」
中に思うまま射精していくと姉貴はブルッと震えた。
そして……。
「あああ、アンタがあんなに舐めるからぁ……」
姉貴のオシッコが漏れてしまっていた……。

★水曜日
夜――皆が寝静まると、要芽姉様や瀬芦里ねぇねぇと
いったアダルト組はお酒をガンガン飲むことがある。
2人だけで通じ合うものもあるのだろう。
ただ酒の肴は俺そのものだった。
「やれやれ……法廷続きで疲れたわ。ちゅっ」
要芽姉様はワインを飲みつつ、俺の唇を吸ったり頬を
撫でたりして、顔を愛でている。
「ちゅぱ……んー、クーヤの先走り美味しいねー」
ねぇねぇは俺の股間に顔を埋めてまったりとペニスを
舐め続けているので、俺も嫌ではなかった。
「その検事腹立たしいわよね。考えが古すぎるわ」
「はい、そーですね」
お姉様のちょっとしたグチを聞くのも弟のつとめ。
「ふふ、もしかしてイきそうなの？」
「は、はい、ねぇねぇが本格的に……く」
「こらえなさい」
「無理です……う！」
精を放つと、喉を鳴らしそれを飲むねぇねぇ。
「くすくす。…本当に早漏ね。可愛いけどね」
俺が射精している表情をしげしげと眺めてから、舌で
頬を舐めてくる。
ねぇねぇはといえば股間から頭を離さなかった。
姉様も、舌を絡ませてきたり動きが激しくなる。
そのまま執拗な愛撫が続くとすぐに2回目の絶頂が。
俺は再びねぇねぇの口内に盛大に射精しながらお姉様
にたっぷり唾液を飲まされ続けた。
「ごくっ……ごくっ……美味しい～　また頂戴ー」
「ぷはっ……も、もう……」
「こら、勝手に口を離さないの、んー」
「んっ……ちょ、ぷは、お姉様今ねぇねぇと会話」
「あのね、ねぇねぇさすがにそんなにすぐには」
ねぇねぇが左の乳首の方を舐める。
姉妹の連携で、それを見ていた姉様も即座に逆の乳首
を舐めてきた…2人とも舌の動きが巧みすぎる。
「ほら、すぐに元気になってきたじゃない」
「早漏なんだから復活は早くないとね」
「くっ……う」
「情けない顔をしないの、可愛がってあげるから」
「再びいっただきまーす」
またしても口を塞がれ肉棒をくわえられてしまった。
「明日は遅いし……朝方までこのまま私とキスよ」
要芽姉様は心底愉しんでいた。

★木曜日
今日は朝からトレーニングだった。
筋力がおちないために、ひたすらねぇねぇと2人で、
国道１３４号を駆けていく。
「ほらー、遅れてるぞ、クーヤ！」
あの人朝方まで飲んでたのに元気すぎる。
まぁ飲んでたのは精がつくものだから元気なのか。
「ぬあああ！　根性!!」
体を維持したいので気合でねぇねぇについていく。
ハードなトレーニングだったが走り終えれば…
「よーし！　良くやったよ!!　頭なでなでー」
わしゃわしゃと頭をなで回される。
「せっかくだからサーフィンでもしてくかにゃー」
突飛な発想はさすがだった。
――ねぇねぇとの鍛錬も終わり、柊家に帰宅する。
掃除に頑張っているともねえを発見。
パッツンパッツンのジーンズが揺れている。
「ともねえお掃除お疲れ様」
挨拶ついでにお尻を撫でてみた。
「わっ……あぅ、もう空也、そういうのダメだ」
怒られてしまった。
スキンシップがしたい俺は、ともねえが掃除を終わら
せて汗を流すためにシャワーに入るまで待機した。
ともねえがシャワーを浴びてる所に乱入する。
「お背中流しますー」
「あぅぅっ!?」

場のない風呂場では無意味な事だった。
ヌチャッという音を立ててボディソープをともねえの体に塗り込んでいく。
首筋や耳の裏、鎖骨などを軽くくすぐると甘い吐息を出してくる。
「はい、胸も洗いますからばんざーいして」
「じ、自分で洗えるよ空也……」
「だーめなの。はい、ばんざーい」
「……ばんざーい」
ともねえは相変わらず、とっても弱気だった。
念入りに、果実のような胸を愛撫していく。
見事なヒップにもボディソープを塗り込んだ。
「…ふうッ……く……うぁ…あ…」
大分とろけてきたともねえの唇を吸った。
そのまま、秘所にも指を這わせる。
「ちゅむ……ちゅっ。空也、そこだめ……」
「濡れてて気持ちよさそうなのに？」
「あうぅ……いじめる……んく、あっ」
恥ずかしがり屋のともねえの体、あらゆる所をくまなく触り続けていると、力が入らないのか、くたっと湯船のところにもたれて手をついた。
後ろに向けてむっちりしたヒップが突き出される。
「これは、後ろから来いって事だねともねえ」
「え…あぅ、別にそういう意味じゃ、あっ！？…ああ」
既にかなり濡れていたのでスムーズに肉棒は入った。
背後から勢いに乗ってズンズンと突きまくる。
「あっ、あぁっ……ふぁぁっ、そんな、あっああ」
揺れる巨乳を揉みしだきながらピストン運動を続行。
すぐにでも射精したかったが、ともねえもしっかりと気持ちよくなってもらわないと悪い。
腰を念入りに使って肉棒を膣壁に擦りつけていく。
「んあ、…あ……へ、変な……気分、んあ」
「イっていいよともねえ、俺も一緒に……ん！」
勢いよく、射精を開始する。
しかし、1度出ただけではまだ収まらない。

「ともねえ、俺のが中で小さくなってないの分かる」
「う、うん……熱くて……固くて……そのまま」
「じゃあそのまま再開するよ」
ヒップに思う存分腰を叩きつけた。
「あっ……あっ、あっあっあっ、く、空也ぁっ！」
「……ふぅ……」
事後、俺達はともねえの部屋で横になっていた。
つやつやした俺の表情と、恥ずかしそうなともねえ。
「ごめんね。バックから5回はやりすぎちゃった？」
「ううん別にいいよ……優しかったし」
あれで優しくなってるんだから過去の俺も鬼だな。
ともねえは、夕方に向けて昼寝タイムなのだ。
さすがに休息の時間を邪魔するわけにはいかない。
「という事で、俺も寝ます」
ともねえの胸に顔を押しつけ目をつぶる。
グッスリと昼寝できそうだった。

★金曜日
お隣さん（犬神家）に遊びに来ていた。
役者である帆波ねぇやがようやく撮影から解放されて歩笑ねーたんも原稿を納入したという良き日。
2人の機嫌の良さは絶好調だ。
「どこかに遊びに行かなくていいの？」
「いいのいいの家族で家にいるのが一番っ」
「うんうん。クー君も私達とリラックス」
2人でベタベタしたり、俺にベタベタしたりする。
一緒に食事や風呂だけでは終わらないと思った。
――そして夜。スキンシップは段々過激になって……
「よーし、2人相手に俺頑張っちゃうから」
ねぇやとねーたんのお尻が、両方ともこちらに突き出されている。
「恥ずかしい……」
「空也ちゃんったらケモノね……」

「ともねえ、俺のが中で小さくなってないの分かる」
「う、うん……熱くて……固くて……そのまま」
「じゃあそのまま再開するよ」
ヒップに思う存分腰を叩きつけた。
「あっ……あっ、あっあっあっ、く、空也ぁっ！」
「……ふぅ……」
事後、俺達はともねえの部屋で横になっていた。
つやつやした俺の表情と、恥ずかしそうなともねえ。
「ごめんね。バックから5回はやりすぎちゃった？」
「ううん別にいいよ……優しかったし」
あれで優しくなってるんだから過去の俺も鬼だな。
ともねえは、夕方に向けて昼寝タイムなのだ。
さすがに休息の時間を邪魔するわけにはいかない。
「という事で、俺も寝ます」
ともねえの胸に顔を押しつけ目をつぶる。
グッスリと昼寝できそうだった。

★金曜日
お隣さん（犬神家）に遊びに来ていた。
役者である帆波ねぇやがようやく撮影から解放されて歩笑ねーたんも原稿を納入したという良き日。
2人の機嫌の良さは絶好調だ。
「どこかに遊びに行かなくていいの？」
「いいのいいの家族で家にいるのが一番っ」
「うんうん。クー君も私達とリラックス」
2人でベタベタしたり、俺にベタベタしたりする。
一緒に食事や風呂だけでは終わらないと思った。
――そして夜。スキンシップは段々過激になって……
「よーし、2人相手に俺頑張っちゃうから」
ねぇやとねーたんのお尻が、両方ともこちらに突き出されている。
「恥ずかしい……」
「空也ちゃんったらケモノね……」
「スキンシップだよ。では頂きます」
その2つの尻を同時に撫で回し感触を楽しむ。
「んん、まろやかだね」
ねーたんはお尻の割れ目を指でいじくって、ねぇやはヒップそのものを、ゆさゆさと揉んで楽しむ。
「クー君のえっち……」
ねーたんがもじもじするが、それは俺から見てお尻を揺らしているサービスにすぎない。
「2人ともっと俺にむかってお尻突き出して」
「うぅ……」
テレビをつければ、ねぇや主演の映画が流れていた。
「なんかこうして見ると興奮しちゃうね」
そう言って俺はまずねぇやに挿入する。
バックから貫かれ、ねぇやの体はビクンと反応した。
「あぁ……熱いわっ……空也ちゃん」
ねぇやに挿入しつつねーたんのアソコは指でお相手。
「んっ……ああぁ……クー君の指、入ってくる」
突く度にねぇやの美しい尻肉が揺れている。
俺は腰のスピードをどんどん速めていった。
「あぁン、ん、すごい……ん、あああ」
ねぇやを突きまくるのに集中したいので、その尻肉を両手で抱え込んだため、ねーたんがあぶれてしまう。
ねーたんは俺の後ろにまわりこみ、俺のアナルに舌で愛撫しはじめた。
「んん……クー君……ぺろ……ん」
アナルの内側まで甘く舐められ、俺はねぇやの中で盛大に射精した。
「あああ凄い、空也ちゃんの、どんどん入ってくる」
ねぇやはガックリと力が抜けてしまったようだ。
「でも俺はまだまだいけるよ、ねーたん」
俺はねーたんを抱きかかえて、挿入した。
「あああ、クー君っ」
「やっぱり濡れてたね……えっちだなぁ」
「ううう（顔真っ赤）」
「今日はねーたん相手に後4回はいけちゃうな」
「よ、よん？　クー君凄すぎ……ん、くぅ、アン」

「無理？　負担はかけないよ」
「やってみなければ……ンッ……分からな…い」
「とにかくいろんな体位でやってあげるね」
ねーたんの可愛いあえぎ声を聞きながら俺は腰を動かし続けた。

★土曜日

今日は要芽お姉様がオフなので、柊家から皆で一緒に花火を見ていた。
海岸の方でやっている花火は年々規模が大きくなり、人の数も半端ではないので家の屋根から見るのが丁度いい感じだ…全員が屋根の上というのがカオスだが。
「タカ、落ちるんじゃないよ」
「だ、大丈夫よこれぐらい余裕みたいな？」
屋根から落ちそうな雛乃姉さんの隣にはともねえ。
高嶺姉貴の隣には瀬芦里ねぇねぇがついている。
「お姉様屋根怖くないですか？」
「大丈夫よ。むしろ楽しいわ。蚊が来たら嫌だけど」
「俺が隣にいるんで安心して下さい」
「ふふ……」
瀬芦里ねぇねぇはビールやらを持ち込んで屋根の上でくつろぎまくっている。
隣家の窓からはねぇやとねーたんが手を振っていた。
皆で花火大会をまったりと鑑賞する。
お姉様が、俺の手を握ってきたので握り返す。
「どうもね。花火は好きなのだけど切なくなるわ」
深夜、お姉様は部屋でそんな事をつぶやいた。
「だから今日は空也と寝ようと思ったの」
「喜んで添い寝しまーす」
「ふふ、ではまず私が悪戯されないためにすっきりしてもらいましょうか」
「俺悪戯なんてしませんて」
「信用できるかよ」
俺は黙るしかなかった。

黒の下着で固めたお姉様が、肉棒をしごきはじめる。
相変わらず手の動きが半端じゃないが、今日は調子に乗ってリクエストしてみた。
「たまには口でお願いしたいな」
「……は？（ギロリ）」
「……まぁいいわ、たまにはね」
俺は土下座の準備をしようと思ったが許可された。
今日のお姉様は、花火効果か開放的になっている。
赤い舌をチロリと出して。濃厚な愛撫がはじまった。
亀頭部分を悩ましい表情でゆっくりと舐めてくる。
俺は綺麗な黒髪を撫でて、奉仕を楽しむ。
少し酔っているのでいつもより大胆な姉様は、袋の方を口に含んでチューッと優しく吸ってくれた。
「ふふ、もう先走りを出してるのね」
ペニスを手前に倒して、亀頭の表側を舐めてきた。
そのまま亀頭の周囲をねっとりと舐め続ける。
時には舌先で尿道口をちくちくと刺激してきた。
そして、にじみ出てくる先走りを吸い取っていく。
「姉様…うぅ、そっちも気持ちよくなって」
俺は手を伸ばして姉様のブラジャーを外した。
見事なバストが丸見えになったが、姉様は手で乳首を隠してしまった。
俺は無言で、そのまま胸を手で掴んで揉みしだいた。
「ちゅぷ……ちゅぱ……ちゅ……ン、もう……」
突然のいたずらに少し不機嫌だったが。気をとりなおして舐め続けてくれていた。
そのまま姉様の乳首をコリコリとつまんで遊ぶ。
「そろそろ出すよ……く」
「んむ……れろ……ん、む、んんっ!?」
俺はそのまま姉様の口内に射精した。
珍しい姉様のフェラだったので興奮度はハンパではなく精子も凄まじい量が放出された。
「……ん、ごく……じゅる……んむ、ん」

精液を飲み干した後、なおも後始末を続けるお姉様。
なかなかこういうスキンシップも多くなってきた。
これなら俺はハーレムが狙えるのでは？と思う。
だが、姉様の舌の動きで我に返った。
これが既にハーレムと言えるものではないだろうか。
姉様が亀頭を軽く口に含んでは、ペロペロと残り汁をすくいとるように舐め、掃除してくれている。そんな様子を見て、俺はこれ以上何を望むというのか。
余計な動きはしない方がいいな。
今のままで楽しくやっていこう……だいたい。
「まったく。最近勘違いしているわよ空也」
こうやって一緒に寝ていると、完全に俺が下の立場に戻ってしまう。
「あまりいい気になると、お仕置きしてしまうから」
「気をつけます、お姉様」
甘えるように言えば不機嫌ではない限り、やれやれと許してくれる人だった。
「今日はもう眠りましょう」
姉様に抱きつくようにして、眠る体勢に入る。
柔らかくて暖かくて、何よりも安心できる場所。
「お休みなさい、お姉様」
「お休み、空也。歌を歌ってあげるわ」
「♪ねーむる空也の可愛さよー♪　ねんころろー…」
「……お姉様？」
「Ｚｚｚ」
相変わらず子守歌を自分で歌って自分で寝る人だ。
……俺も寝よう……。
最愛の姉に軽くキスして、目を閉じることにした。

――以上が俺の1週間です。1年後の俺、成長していますか？さらにクールな男に成熟していきたいです。
それでは　さよなら　さよなら　さよなら。

「ってあんじゃあこりゃあああああ!!!」
1年前の自分を見ていると恥ずかしくなってきた。
我ながらフリーダムすぎ…あれが若さというものか。
今の俺は1年前と比べて、ひとつうえの男になった。
オヤジの会社を手伝うようになり働く人間になった。
社会的責任を果たすようになり、もう1年前の俺ほど甘ったれてはいないと自負できる。
そう、人は変わっていかなくてはいけないのだ。
――それでも、変わらないものもあるけどね。
「空也ー。スイカ切ったから。皆で食べよう」
「うん、ともねえ」
居間に行けば、犬神家から遊びに来ている2人を含めいつもの人達が集結していた。
「がっつきすぎて、腹をくださんようにな」
「ふふ……夏のスイカ。風雅ね」
「うまうまうま。赤いとこ限界まで食べるぞー」
「たくさんあるからね。はい、塩はここだよ」
「優雅に　しゃくりしゃくり　と食べるのが大人よ」
「くーや、お姉ちゃんの分もあげようか～？」
「これならカロリー気にせず食べられるわっ」
「クー君。スイカの種、とってあげるよ」
この人達が、俺のお姉ちゃんであること。
そして俺の事をとても大事にしてくれていること。
それは、いつまでもいつになっても変わらない。
だから俺もこの人達のために、懸命に生きていこう。
柊家での生活はこれからもずっと続いていく――。

「柊空也のクールな7日間」
執筆／タカヒロ

後書き　タカヒロ

お買い上げありがとうございます
タカヒロです。
ゲストとしてＳＳ書かせて頂きました。
姉しよ1が発売されてからもう5年が経過しましたが
久々に柊家の面々を書けて嬉しかったです。
誰かに絞るのではなく、全員を取り上げました。
空也が好き放題やっているお話ですが
「2」後の彼の1週間はだいたいこんな感じだと思います。
ひなのんが基本的に剛胆な人なので、
「弟が勃起したら姉が抜いてやれ」
みたいな。
やってる事はキケンなんだけど、皆個性を失わずに
活き活きとやっていけるのが柊家のいいところですね。

このゲームは自分の出発点なので、大事に大事に思ってます。
これからも柊家は皆で仲良く、不滅ですね。
いつかまたこういう事できる機会があればいいなと。
そんな時は要芽お姉様をピックアップしたい次第。
姉貴もいいなぁ……。
結局全員好きなんですけどね。

私の近況としては、みなとそふとで、新作ゲーム
「真剣で私に恋しなさい」の企画シナリオを作成してます。
よろしくお願いします。

後書き　白猫参謀

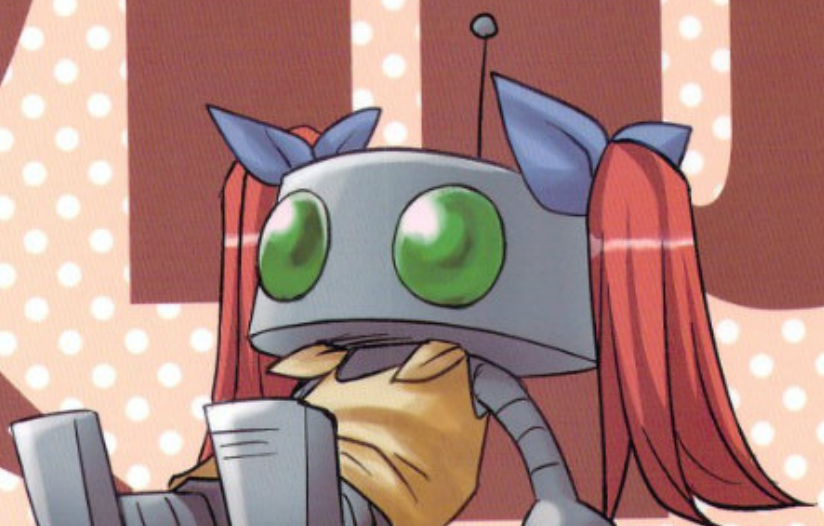
すいません、ホントすいません
必死になってやったのですが最後の方になって
時間切れを迎えてしまいました…
終盤仕上げする時間がありませんでしたが
新刊落とすのだけは回避しようと…
チエックする時間も後書きにイラストを書く時間もないので
凄い事になりそうな気がします

同人誌2冊目にして胃に穴が空く程の
洗礼を受けることとなりました…
なにより買ってくれた人に申し訳ないです
タイトルの「姉ちゃんとしてみました」
どこが？
ＨＰで昔語った「姉貴漫画書きたいな」というセリフを
今回の同人で「ちゃんとする」つもりでしたが
もっとちゃんとしろという感じです。

お詫びや汚名は次回作品で返上出来たらいいなと思います。
本当にありがとうございます

■2008年 8月17日 発行
■発行:サークル色天使 代表:白猫参謀
■印刷:サンライズパブリケーション 様
■連絡先:
URL:http://www2.tky.3web.ne.jp/~smdw/
メールアドレス:smdw@tky3.3web.ne.jp

■18歳未満の購入、閲覧を禁ず
■作者の許可無く無断で転載・複製を禁ず

姉ちゃんしてみました!

姉